

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第34回新潟化学療法講演会

日 時 平成7年6月10日(土)

会 場 NIIGATA テルサ

## I. 一般演題

## 1) Streptococcus pneumoniae の感受性

 金子 陽子・坂田 房子  
 吉田真理子・加茂 綾子 (厚生連中央総合)  
 田中 恵子 (病院検査科)

1994年度における S. pneumoniae の検出は433株2.3%と1993年度の388株2.0%から若干増加した。433株における、高度耐性株は1%4株、中等度耐性株は18%78株だった。経口セフィム系薬剤を中心に K-B ディスク法で薬剤感受性を実施した結果は CDTR, CFTM が100%, CPDX 96%, CFDN は80%, CCL 79%, CAM 49%の感受性だった。CTM, OFLX にもわずかではあるが、耐性がみられた。NCCLS の K-B ディスク判定区分によると、当院の耐性 S. pneumoniae は47%にもなり微量液体希釈法と食い違いを示しており、今後 NCCLS のマニュアルに添った検査方法が望ましい事がわかった。PCGMIC 値 0.125  $\mu\text{g/ml}$  以上の S. pneumoniae 22株の経口セフィム系薬剤累積百分率では、CDTR, CFTM に差がみられ CDTR < CFTM < CPDX < CFDN < CCL の順に良い MIC 値結果だった。

## 2) 肺炎球菌の薬剤感受性

 尾崎 京子・高野 操 (新潟大学附属病院)  
 岡田 正彦 (検査部)

1994年に分離された Streptococcus pneumoniae 115株(同一患者の重複は除外)の薬剤感受性について検討した。ペニシリン低感受性を含む耐性株(MIC 0.13  $\mu\text{g/ml}$ 以上: PRSP)は33株(28.7%)あり、うち MIC 1  $\mu\text{g/ml}$

が13株と最も多く、2  $\mu\text{g/ml}$  の株は4株でそれ以上高い株は認められなかった。

S. pneumoniae 分離例の年齢分布は0~80歳代で認められたが、10歳未満と60歳代に特に多く、PRSPの分離頻度も両者が多かった。材料別では喀痰、咽頭で75%を占め、その他耳・鼻・眼の検体や血液からも2株分離された。PRSPは何れの材料からも検出されていた。

ABPC, CMX, CFTM の薬剤感受性は PCG とほぼ相関しており、PRSP に対しては PCG と同等かそれ以上の MIC を示した。IPM は全株0.25以下で発育阻止されていたが、PCG 耐性株で MIC が高かった。OFLX は PCG と相関せず、MIC 4 以上が2株あった他は1~2に分布していた。EM は半数が耐性を示したが、特に PRSP に多かった。

## 3) 当院における小児で分離された肺炎球菌の薬剤感受性の検討

 笹川富士雄・福島 英樹  
 鈴木 博 (水原郷病院小児科)  
 鈴木 康稔・関根 理 (同 内科)  
 樋口 興三・金沢 ちあ (同 検査科)  
 富山 道夫 (とみやま医院)

肺炎球菌は小児科領域においては髄膜炎、肺炎、気管支炎、中耳炎などの起炎菌として重要である。

今回われわれは、1994年8月1日から1995年5月2日の約9カ月間に水原郷病院小児科および耳鼻科(15歳以下)で得られた960検体の一般培養で80株の肺炎球菌を分離し、このうち27株で薬剤感受性、 $\beta$ ラクタマーゼ産生性を測定した。

分離された肺炎球菌に対して PCG, ABPC, CDTR-PI などが強い抗菌力を示した。

PC 中等度耐性肺炎球菌は8株(29.6%)、PC 高度耐性肺炎球菌は2株(7.4%)に認められた。

PC 中等度以上耐性肺炎球菌10株では、特に、CDTR-PI, CFTM-PI が比較的強い抗菌力を示した。

$\beta$ ラクタマーゼ産生株はみられなかった。

これらの結果より、一般病院の小児科においても PC 耐性肺炎球菌を念頭に置いた薬剤選択を考慮すべきであると考えられた。